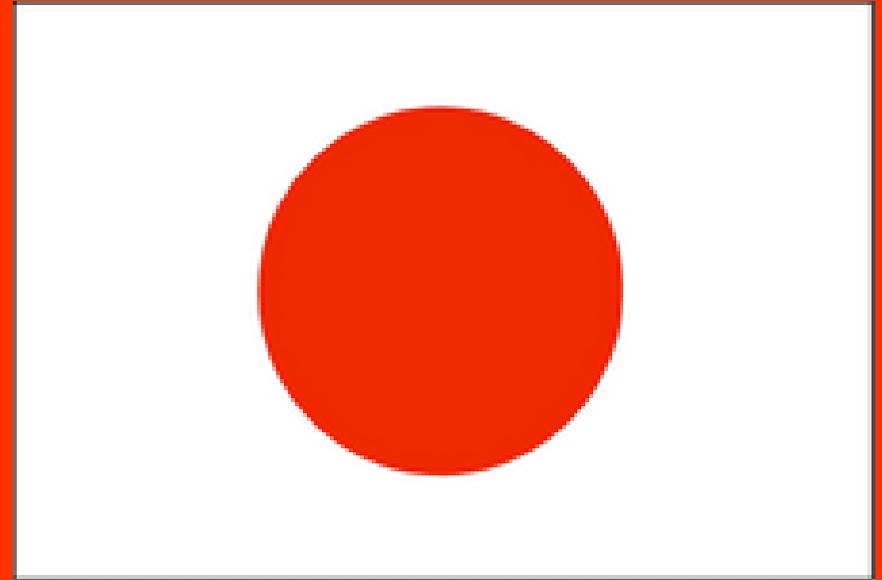


阪神・淡路大震災から10年

続く両国の民間親善交流

ポーランド国立物理化学研究所教授フィリペック博士



【 国旗の意味や由来など 】

ポーランドの伝説的建国者レヒが、赤い夕日を背景に飛ぶ白い鷲を見て吉兆と思い、赤地に王冠付きの白鷲を紋章にしたという言い伝えに由来する。上半分の白は白鷲を、また下半分の赤は赤い夕日と自由を求める戦いで流れた血を表しており、1919年にこのデザインが国旗として定められた。



1995年01月17日未明、阪神・淡路地域を未曾有の大地震が襲います。想像に絶する被害の中、当時のポーランド駐日大使館参事官フィリペック博士は多くのボランティア及び兵庫県に働きかけ、震災にあった子供達の小さな傷ついた心を癒せることを念じて、ポーランドに子供達を招待します

両国間には明治以降素晴らしい国際親善がねずいていましたその内の一つに第一次世界大戦とロシア革命という大動乱の中でシベリアに取り残されたポーランド孤児約800人が、日本人の手で救済される歴史がありました。日本赤十字の手で国内に移送された孤児を日本人は親身に世話し、体力がついた者から米国に送り出しました。腸チフスにかかっていた孤児を必死に看護した日本の看護婦が亡くなっています。米国に船出するとき、孤児たちは保母さんと別れたくないと乗船を泣いて嫌がっています。祖国に帰った孤児たちは、日本への感謝の念を終生忘れなかったと云います

今回のポーランドへの招待には、このような素晴らしい歴史が隠されていたのです



さあ、搭乗です。見知らぬ異国に！ 勇気ある子供たち

於関空



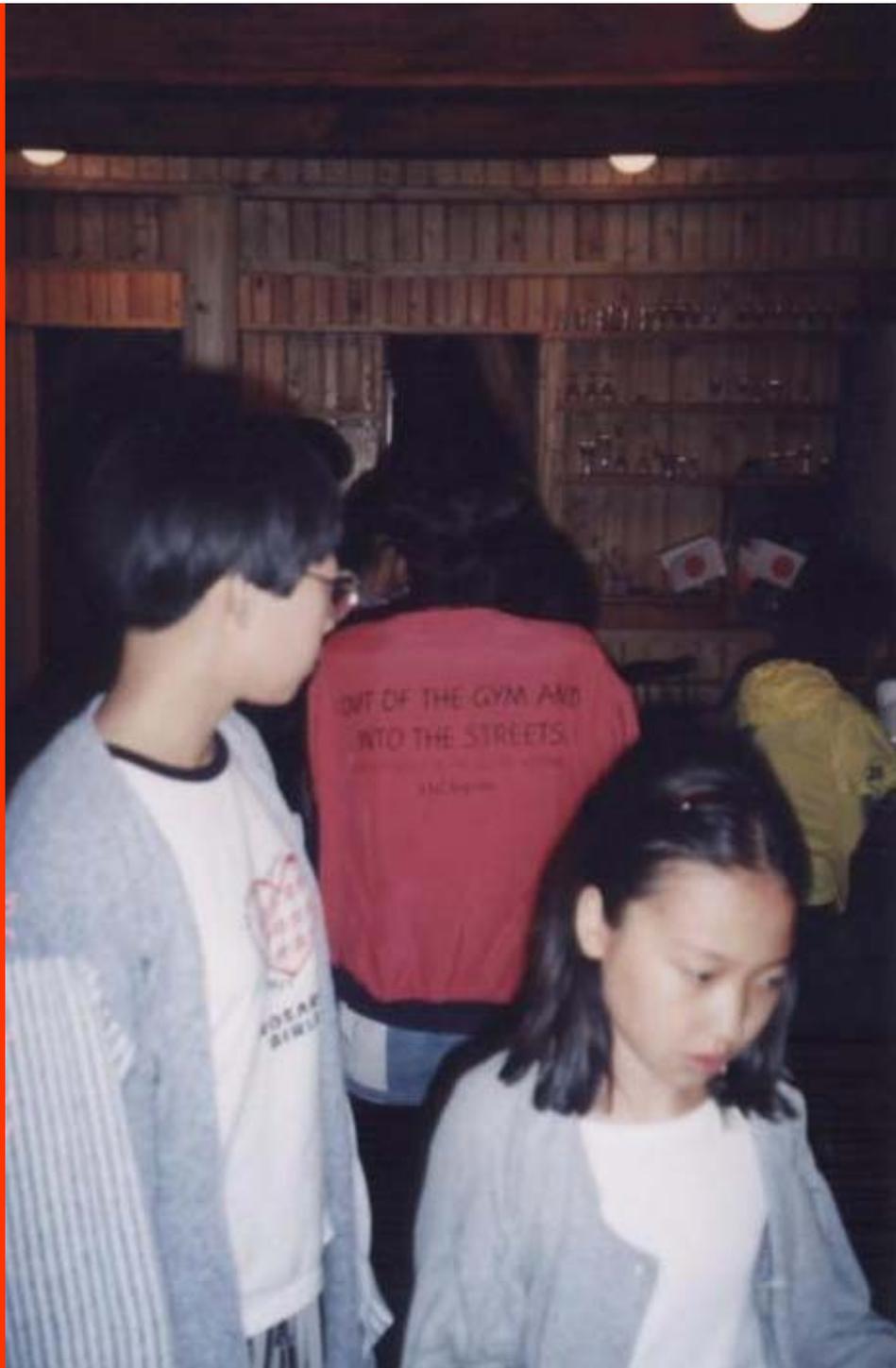










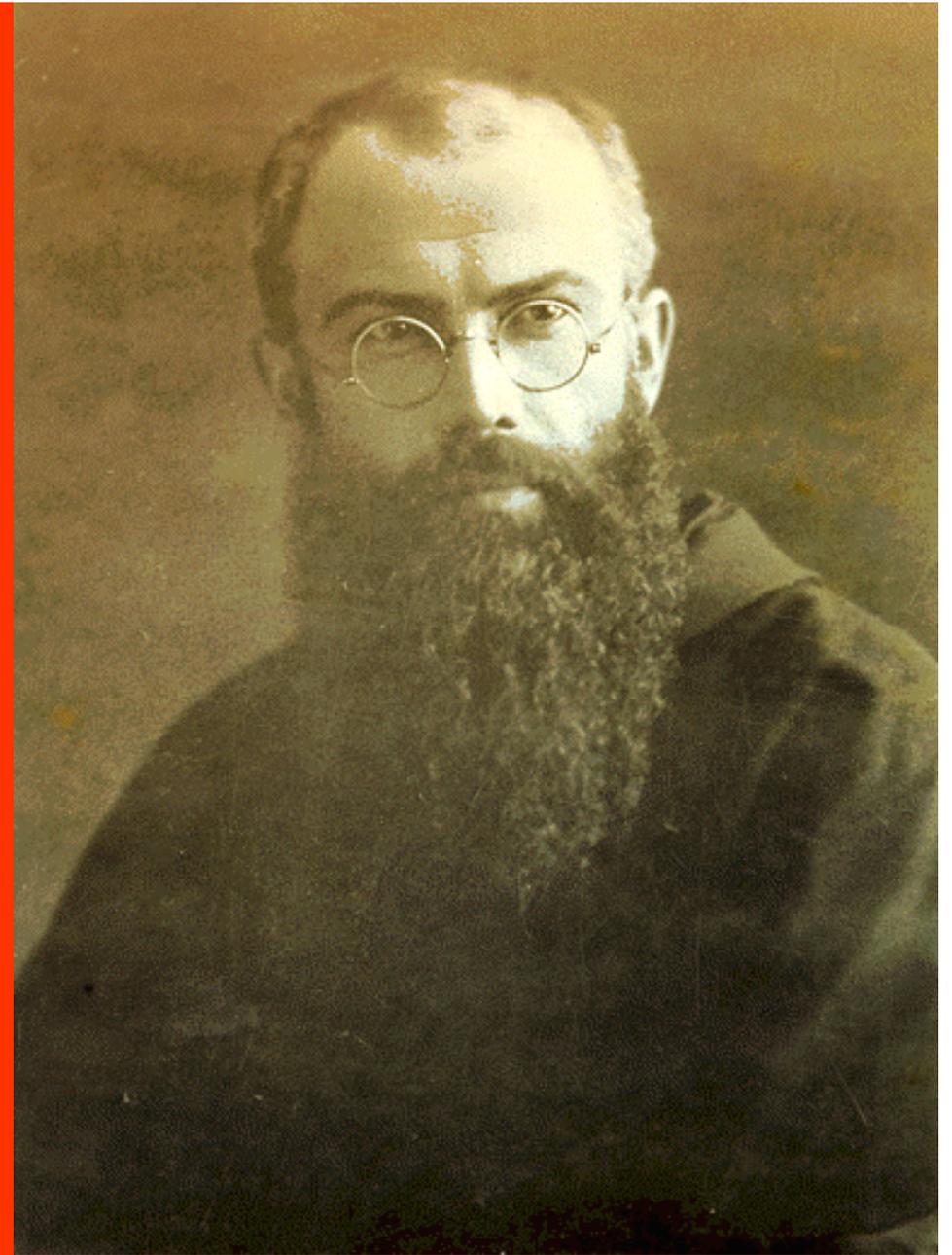






マキシミリアノ・マリア・コルベ。
彼は修道士と共に1930(昭和5)年
4月24日、長崎に上陸し大浦天主堂
の近くに住みました。1936(昭和
11)年5月に故国ポーランドへ帰国
しましたが、やがて第2次世界大
戦が勃発し、ナチス軍に捕らえら
れ、アウシュヴィッツ強制収容所
へ入れられました。ここで死刑を
宣告された家族を持つ1人の父親
の身代わりを進んで引き受け、
1941(昭和16)年8月14日、愛のため
に生命を捧げ、亡くなりました。

1982(昭和57)年10月10日バチカ
ンにおいて、ローマ法王ヨハネ・
パウロ二世からカトリック聖人に
あげられました



St. Maximilian

震災から10年が経過しました

ポーランドに3年に渡って招待された合計70名強の小学生、中学生も大きくなりました

今も元気に頑張っているのだろうか、参事官生活を終え、元の古巣の国立物理化学研究所に戻っていたフィリペック博士は、10年経過した2005年に再度ポーランドに子供達を招待します

以降のアルバムは、再び現地を訪ねることが出来た子供達(?)の記録です



10年振りの歓談です。時間はあっという間に！



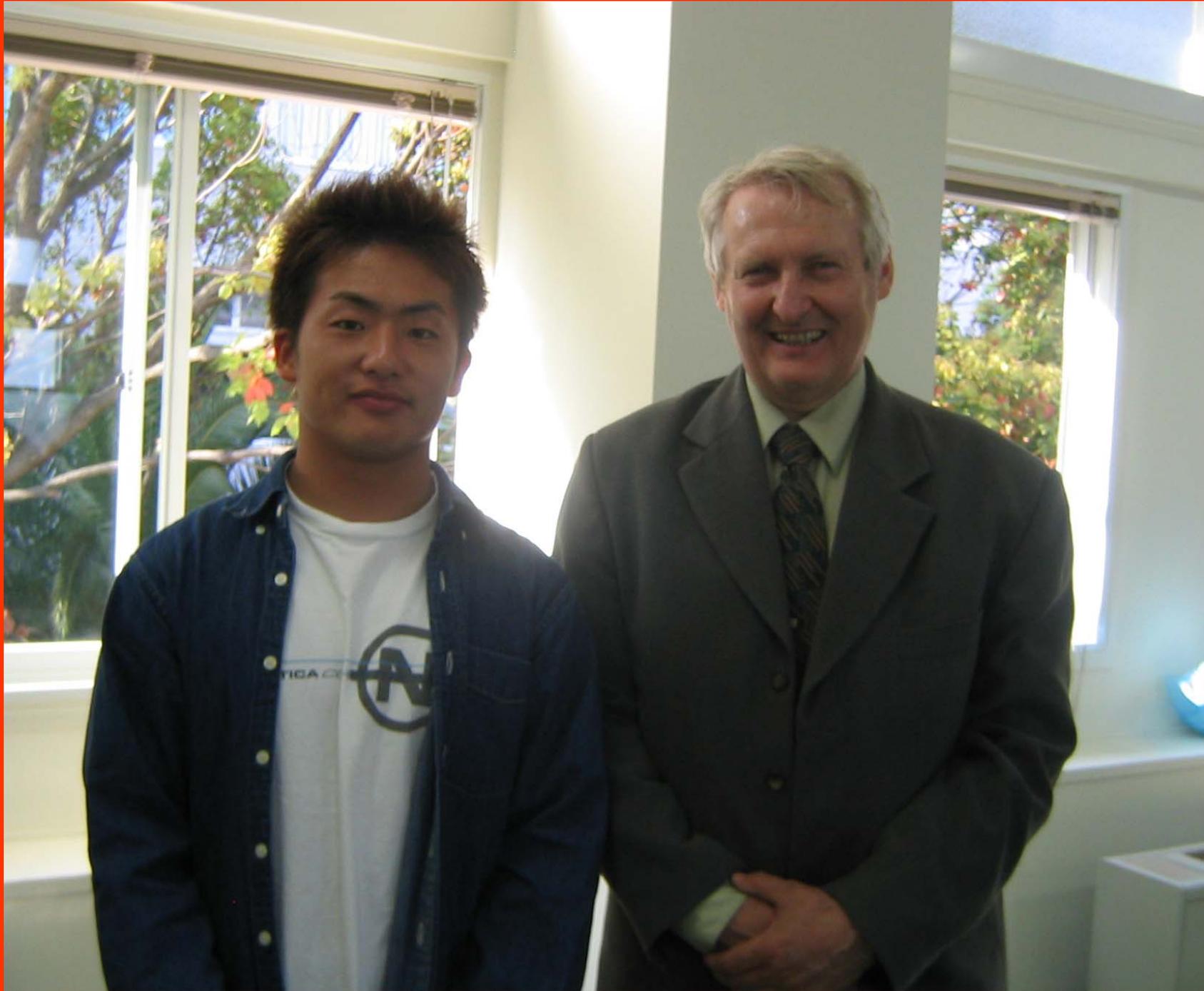
















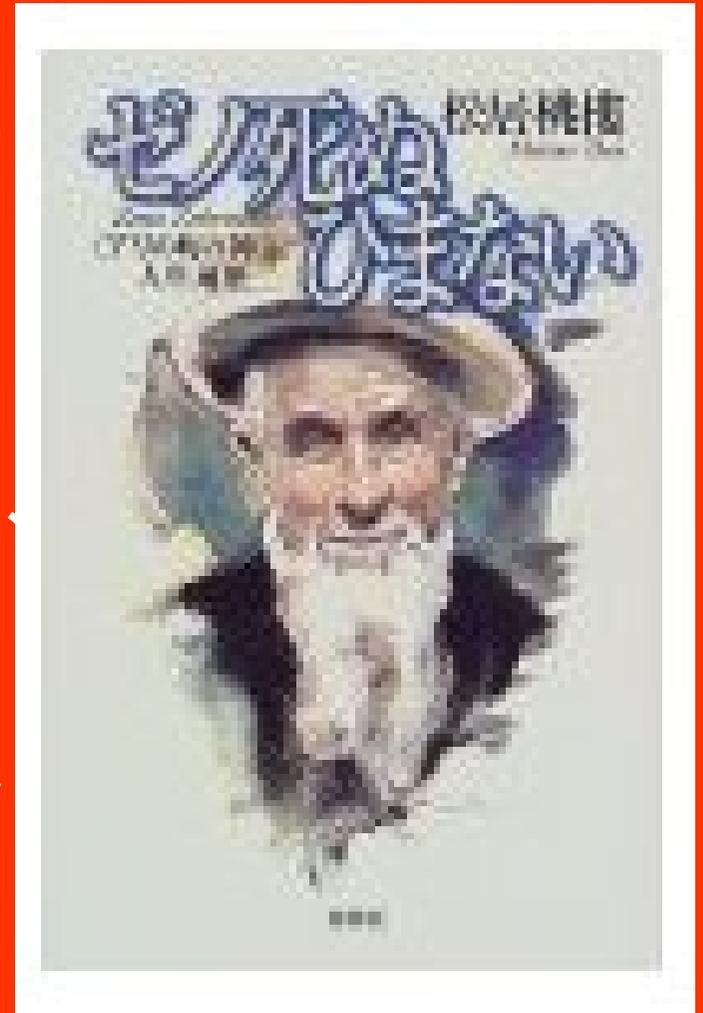




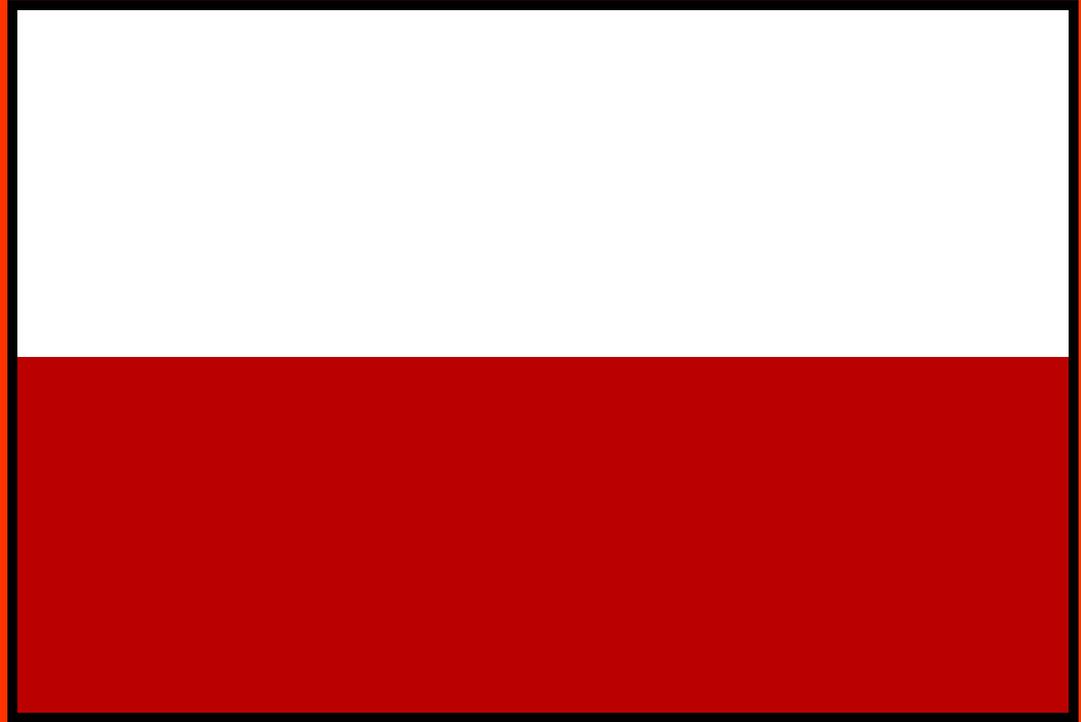




1924年コルベ神父とゼノ神父(修道士)は出会います。1930年、長崎に来日。当時は戦争の真っ直中で、外国人は旧日本軍の憲兵隊などに監視されていました。にも関わらず、全てを許し、困っている人を助けるため貢献してきたゼノ神父。多くの人々が原爆投下下の苦境の中、ゼノ神父のその優しさと慈悲に助けられます。ゼノ神父は戦後の混乱期がある程度おさまると、今度は日本全国の困っている人々を助けるために尽力します。大陸からの引揚者で作られていた貧しい街「アリの街」での、北原怜子(サトコ)さんのゼノ神父と出会いも未だに語り継がれています。ゼノ神父は1982年にその90歳の生涯を終えますが、2002年の天皇陛下東欧訪問でも、ポーランド大統領夫妻主催の晩餐会で、陛下は日本国民を代表してゼノ修道士への心からの感謝のお言葉を述べられて、ご挨拶の最後を締めくくられています



再訪 ポーランド共和国



以下のアルバムは順不同です







































































































IV FESTIWAL
KULTURY JAPONSKIEJ 
第4回 日本文化の日
RZESZÓW 2005


Fundacja Polsko-Japońska YAMATO
Centrum Kultury Japońskiej w Przemyślu



第4回 日本文化の日
RZESZÓW 2005

































ポーランドからの恩返し ～シベリア孤児～

ポーランドからのメッセージ

平成11年8月に、ポーランドから『ジェチ・プオツク少年少女舞踊合唱団』が来日、合唱団はヘンリク・サドスキさん(88)からの次のようなメッセージを携えてきた。

「20世紀の初め、孤児が日本政府によって救われました。シベリアにいたポーランドの子供は、様々な劣悪な条件にありました。そんな恐ろしい所から日本に連れて行き、その後祖国に送り届けてくれました。親切にしてくれたことを忘れません。(合唱団は)私たちの感謝に満ちた思いを運んでくれるでしょう。日本のみなさん、ありがとうございました」

サドスキさんは更に「一番大事にしている物を皇室に渡してほしい」と、救出当時の写真を託し、「孤児收容所を慰問した皇后陛下(貞明皇后)に抱き締めてもらったことが忘れられない」と話したという。

